派遣報告書

【氏名】　　時田　伊津子

【派遣先期間】　Institut für Deutsche Sprache（ドイツ語研究所；ドイツ・マンハイム）

【派遣期間】　　2012 年 2 月 10 日～2012 年 4 月 3 日（現地 4 月 2 日出発）

【研究分野】　　ドイツ言語学

【研究テーマ】　二重目的語構文とその項

【派遣の概要】

報告者は 2012 年 2 月 10 日～4 月 2 日の間，ドイツ言語学研究の中心である Institut für Deutsche Sprache（ドイツ語研究所，以下 IDS）に滞在し，研究者との意見交換を行い，関連文献を収集した。また，これまでの研究を踏まえて，今後の論文執筆の準備を行った。

派遣中は，ゲスト研究員として IDS の図書館内に設けられた研究スペースを使用し，約 8 万冊の蔵書と，研究所が契約している電子論文雑誌に自由にアクセスすることが出来た。研究テーマとしている二重目的語構文に関する文献と，その周辺的な関連項目を含む文献を精読，あるいは PDF ファイル形式，コピー，スキャン形式にて収集した。

IDS での受入研究者である Hardarik Blühdorn（ハーダリック・ブリュードルン）教授とは計 5 回意見交換を行い，派遣中は主にその話し合いの内容を元に研究活動を行った。また，研究所所長の Ludwig M. Eichinger（ルードヴィヒ・M・アイヒンガー）教授にもお話を伺うことが出来た。

Blühdorn 教授との面談初回の 2 月 16 日にはそれまでの研究内容と今後の計画について話し合いを持った。まず研究対象とする二重目的語構文は 3 格と 4 格を伴うものに限定することを確認し，これまでの研究成果について概略を述べ，また派遣中の計画，派遣後の計画についてもお伝えした。教授からは，博士論文から発展した内容で投稿論文を数本書くという方向性を提案いただくと共に，研究内容の扱い方についてアドヴァイスをいただいた。後者について具体的には，当該の構文での統語構造，意味構造，情報構造を明確に分離して個々に分析を行い，例えば統語構造と意味構造との関連で 1 本の論文，情報構造で 1 本の論文という目安を立て，今回の滞在ではそのうち一方の論文の準備に集中するのがよいと指導を受けた。また，Blühdorn 教授の著作の中から関連する研究書を紹介いただいた。

その後，関連文献を読み進めた後の第 2 回（2 月 20 日）意見交換では，研究について具体的な事例や調査結果を示して詳細な説明を行うことで理解を得ると共に，改善可能な点の指摘をいただいた。また，特に情報構造について知識を確認しさらに広げるため，次回までに入門書と論文 3 点を読むようアドヴァイスをいただき，さらに関連文献として動詞分析のための不可欠な辞典を関連文献として紹介いただいた。

3 月 2 日には Eichinger 教授のもとへ伺い，研究テーマについて話を聞いていただき，語順についての

新しい論文を紹介していただいた。

第 3 回の面談（3 月 5 日）では，先の入門書と論文の内容を確認した上で研究の方向性についての見解を述べると，情報構造についての Blühdorn 教授の最新の著作と，Eichinger 教授推薦の語順についての論文を読むことを提案いただいた。第 4 回（3 月 20 日）には関連文献の理解を改めて確認し，第 5 回（3 月 30 日）の最終の面談までに，今後執筆する論文の準備としてレポートを作成した。レポートでは，今回の派遣で学んだことと自らの研究と関連づけ，今後の課題を提示した。最後の面談ではレポートについてコメントをいただいた。

また，派遣期間中にフランクフルト大学にて Deutsche Gesellschaft für Sprachwissenschaft（ドイツ言語学会）の研究発表会（3 月 6～9 日）が行われ，コーパス言語学セクションのチュートリアルに参加し，研究発表を一部聴講した。IDS の年次大会（3 月 13 日～15 日）も滞在中に行われ，展示企画を閲覧した。

【派遣の成果と今後の課題】

今回の派遣の一番の成果は文献の収集・精読，教授との意見交換を通し，研究対象を分析する視点が拡張されたという点である。これまでの研究スタイルではコーパス言語学的なアプローチを中心とし，事例の調査結果を主に形態的，統語的な視点から分析し，意味構造との相関性を探ることに重点を置いてきた。今回の派遣では，接続語や否定語と並んで，名詞句や情報構造にも深い造詣をお持ちの Blühdorn 教授にアドヴァイスをいただくことで，これまであまり配慮を払うことができなかった情報構造について多くを学んだ。教授も指摘していたが，ドイツ言語学では情報構造の概念定義や術語が混乱しており，とうてい全てを把握することが不可能である。しかし，二重目的語構文の全体像を扱う際には情報構造は避けられないテーマであることは確かだ。今回，Blühdorn 教授の導きにより情報構造の概念定義を特定の立場から理解することで，構造の要素とその実現形式との関わりも客観的に判断できるようになった。これにより情報構造が持つ二重目的語構文への影響，とりわけ文の中域における語順への影響をより正確に把握することが可能になった。

また，研究者との意見交換を通して，研究への取り組み方の一例も学ぶことが出来た。Blühdorn 教授は多くの研究論文や著作の執筆と並んで，ブラジル滞在中にポルトガル語による論文執筆や，外国人学生の指導も行っており，その豊富な経験に基づいた一般的な研究指導もいただいた。研究テーマに取り組む際はなるべく問題提起を分割して考える方法を取るということや，自分が外国人研究者であるという点を考慮した上で研究対象を決定すべきであること，また論文投稿先の雑誌は内容や目的，雑誌の購読者などに合わせて選択することなども聞かせていただくことができた。この局面については，自らの研究だけでなく，学生の研究指導にも活用することが可能であろう。

今後の最大の課題は，収集した関連文献を読み解き，分析事例を増やし論文執筆に繋げることである。今回の派遣中に注目した情報構造や有生性ついても分析の際に十分調査することも課題である。また，

具体的な研究内容における課題は例えば，以下の点が挙げられる：（1) Hoberg (2006）で語順決定要因として指摘されている Argumenthaftigkeit（項らしさ）を二重目的語構文の 3 格名詞句について問う場合，どの範囲までが該当するかを明らかにすること。(2) 当該の構文の中のうち先行研究であまり記述されていない意味タイプ, すなわち無生物を表す 3 格を伴う文の中で追加関係（動詞例 hinzufügen），対比関係（gegenüberstellen）と所属関係（zuordnen）を表すタイプ（伊藤（時田）2007）について，情報構造的，統語的にさらなる考察を行うことである。これらの点を明らかにすることによって独自性を打ち出した研究成果が提示できると考えている。

以上のように，今回の派遣では文献の収集，研究者との面談によって自らの研究を進める具体的な手がかりを得て，また，第一線で活躍する研究者からドイツ語研究の心構えを直接学ぶことができた。今後は，派遣の成果を論文執筆に繋げて研究を発展させると共に，学生の研究指導の際には今回の経験を活かしていきたい。

参考文献

Hoberg, Ursula (2006): Wortstellung: valenzgebundene Teile und Positionspräferenzen. In: Eroms, Hans-Werner (ed.) Dependenz und Valenz, Dependency and Valency. Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung. An International Handbook of Contemporary Research. Walter de Gruyter.

伊藤（時田）伊津子 (2007):『無生物３格二重目的語構文　－「生物３格」を含む二重目的語構文と対比しつつ－』(2007.6. 承認）　東京外国語大学大学院地域文化研究科提出博士論文.（単著）